平成四年三月上梓をみた「鹿持雅澄研究」のあとがきに先生はこう述べられている。

「つたない小著ながら、この書の成るまでには長年にわたり多くの方々のご恩を蒙っている。雅澄翁のご子孫の方々や佐々木信綱博士が貴重な関係資料の閲覧を心よく許して下さったことは中でもこの上ない幸であったし、恩師先輩の方々からもいろいろ援助をいただいた。このことなくしては本著はあり得なかったしだいである。これらの方々に対し衷心よりお礼を申し上げ、また故人となられた方々のご冥福をお祈り申し上げたい。」と。

ことに佐々木博士の許に行かれた時、もう一人の恩師久松潜一博士の紹介状があったというお話にはそれぞれの先生のお人柄がしのばれ敬慕の念ひとしおである。

今となっては全てが遠い日々の出来ごととしてしか浮んでこないが、過ぎし日貧しくはあったが、よき環境の中よき師に恵まれ小津原頭に青春の日をもてたことに心からお礼を申し上げたい。

先生のご冥福をお祈り申し上げるしだいである。

小関清明先生のこと

元教育学部教授　篠原　義彦

小春日和の昼下がり、人文学部の鈴木先生から電話があって、次号の「高知大国文」に小関先生の追悼文を載せたいので宜しくとのことであった。私以外の執筆者は、渡邉輝道先生、それに大先輩の松岡甫明氏。当方は補導学生でもなければ、先生のもとで卒論をものしたわけでもないので、本来は他の諸兄姉の名を挙げて固持すべ

きところであるが、なぜかすんなりと引き受けてしまった。これも今はなき先生の霊のなせるところかも知れない。

オーストラリアのグレート・バリアリーフの旅から帰って、サムソナイトを片付け、いつものごとくに溜った新聞を斜め読みにして小関先生の訃報を目にした。まだ惜しい旅立ちではある。致し方ないこととはいえ、葬儀にも行けず、すべては後の祭りの為体である。

個人的にもいろいろと御教導を賜ったり、多少の思い出もある。四十有余年も前のことなので、余り定かではないが、伊勢と源氏の講読を小津の校舎で受講した。武蔵野書院から刊行された一冊ものの源氏の抄本で、試験でさてどういう問題が出るのか、勉強不足の当方は、「夢浮橋」のラストかなと思って、それに賭けてみたところ、もののみごとにフィナーレの箇所であった。

小関先生の講義は、そのお人がらそのものがにじみ出ており、常に謙虚な物腰であって、その背後にあたゝかさがあった。飾り立てず、抑制の効いた、お人柄そのもののなせるところであった。

当時は、土佐市の御自宅から、今から思い出すと不思議ではあるが、オートバイで文理学部まで通っておられたし、マイカー族になられたのも、無論国文研究室の教官で最初であったし、後になって、野市町あたりの片側二車線を勘ちがいされて逆方向に走行されたなどという逸話も耳にしたことがある。

先生が生涯取り組んだ鹿持雅澄研究がそうであるように、常に実証的で自己に忠実な先生との出合いに感謝するとともに、先生の御冥福をお祈りするや一入である。